ホイットマンの Democracy について

稲　垣　春　男*

W. Whitman's *Democracy*

Haruo INAGAKI

要　旨

巨視的にまた微視的に躍進的発達を示している，20世紀後半の今日の物質文明は，識者の目を嘆ぜしめるような精神的アンバランスや，道徳的病巣を随所に伴ってきている。民主主義国家を標榜(ひょうぼう)する日本も，現時点において〈民主主義〉の本然の姿，理想の姿を追求することは決して無意味ではないと思う。

自然に生きた詩人，宇宙的規模で遍在する人間愛を謳歌した詩人，ホイットマンは，150年の歳月のへだたりを越えて現代の我々に強力に呼びかけてくる。英知をそなえた健全な個人の成長こそが〈民主主義〉の要諦なりと。

Synopsis

The materialistic civilization of the latter half of the 20th century, although it has been progressing remarkably in both macro and micro spheres, has inevitably brought us mental unbalance and moral deterioration, to our great regret. So it is not a meaningless effort, I believe, for the Japanese, a democratic nation, to seek after the nature and ideals of the true Democracy, following Whitman's ideas.

Whitman, who lived robustly as an ardent admirer of Nature, and who sang the hymn of ubiquitous human Love in cosmic scale, still tells powerfully to our inmost spirits, even though crossing the boundary of 150 years, that the essence of true Democracy is the growth of each stout Individual, provided with golden Wisdom.

目　　次

〔序　論〕 Democracy の詩人，ホイットマン
第1部　Comradeship
第2部　健全なる Womanhood と Maternity
第3部　Nature 信仰
〔結　論〕 Democracy の理想と機能

× × × × ×

〔序　論〕 Democracy の詩人，ホイットマン

Bertland Russell が指摘しているように，[1] 〈民主主義〉の性格はそれが敵視する勢力によって大半決定づけられるものである。アメリカの場合，第7代大統領 Andrew Jackson (1829–37) が一大分岐点となって，いわゆる文化(カルチア)に背を向けて開拓者や移住者の側に立つ，わかり易い平民的民主主義が取り上げられ，それがその後のアメリカ民主主義の大きな特徴をつくり出した。ホイットマンの10歳から18歳までの成長期に在任したこの大統領の政策は，当然彼にも大きな影響を及ぼしたことと思われる。

現に1840年の秋，21歳のホイットマンは，二期をつとめたジャクソンのあと，同じ〈民主党〉(Democratic) 出身で第8代大統領となった Martin Van Buren の選挙運動をかって出た。また翌1841年には，New York で Democratic Review 紙のために執筆している。

ホイットマンは，*Leaves of Grass* の一巻を，

Camerado, this is no book,
Who touches this touches a man,[2]

* 教授　一般教科

と呼びかけて，自己の〈観念の結晶〉(ideation) として，自己の分身として世に問うた詩人であるが，彼が生涯うたいつづけたテーマは〈愛〉(Amativeness, Adhesiveness, 自然愛)[3]であり，永生の〈死〉であり，〈民主主義〉であった。

この三者の関係を考察するなら，〈愛〉と〈民主主義〉はそれぞれ相即不離の関係を営みつつ，人間の生の営みを永遠のものにするのだといえる。ここに彼の thanatopsis[4]の本源がある。こうして個は全に合体し，その死は永遠の生となる可能性を見出すのである。ホイットマンを本邦に紹介した先人中，Love に焦点をあてたのが有島武郎，[5] Democracy を重視したのが白鳥省吾，福田正夫，富田砕花[6]であった。

ホイットマンの民主主義を論ずる場合，当然にその Democratic Vistas[7]（民主主義展望）が取り上げられねばならない。この Vista[8] なる語は，Long narrow view as between rows of trees[9] の原意から発展した長期性をもった〈展望〉(mental prospect) であり，前述の Jeffersonian-Jacksonian democracy の〈超絶論的解明書〉(transcendental version)[10] である。

〈内乱〉(the Civil War) によって国内に生じた，過去のローマン的〈理想主義〉(idealism) と，当時の科学の進歩に伴われた〈現実主義〉(realism)，〈物質主義〉(materialism) の間の深い断絶に橋わたしをしようとして世に問われたのが本書であった。省みて，宇宙時代に入った国際社会の中で，機械文明の洪水と，過去の日本の香り高き伝統や精神遺産との狭間(はざま)に立って焦燥する現代日本人にとって，ホイットマンの一句一句が警鐘の乱打として聞かれる所以もここにある。

Collect（集録）中の Notes Left Over（取り残されたノート）篇で注目すべき諸章としては，Nationality —(And Yet)（国民性—末だし），Democracy in the New World（新世界における民主主義），General Suffrage, Elections, &c,（普通選挙，公選そのほか），Friendship, (The Real Article)（友情—偽りなき論説），Rulers Strictly Out of the Masses（厳(きび)しく大衆の中から出た統治者），Freedom（自由），そして An American Problem（アメリカの一問題）などが挙げられる。

Floyd Stovall によれば，[11]「草の葉」は，自然の法則の範囲内で望まれうる最も完全な〈自由〉は，肉体的には〈民主主義〉により，心情的には〈愛〉により，また霊魂的には〈宗教〉によってあがなわれることを示している詩集である。なお，既述のように「草の葉」の trilogy（三部作）として祝福される対象には，Love, Life (=Death), Democracy が考えられるわけだが，このうち，Life (=Death) のテーマはこの Stovall のように Religion として考えることができるし，また William Sloane Kennedy[12] のように Body, Democracy, Religion の三部作と見なす立場も成立する。

ホイットマンにとっては，日に焼け，強壮，賢明で，清潔な一着の仕事着をまとった鍛冶工や水夫こそ理想の大統領であった。

> I would be much pleased to see some heroic, shrewd, fully-inform'd, healthy-bodied, middle-aged, beard-faced American blacksmith or boatman come down from the West across the Alleghanies, and walk into the Presidency, dress'd in a clean suit of working attire, and with the tan all over his face, breast, and arms: I would certainly vote for that sort of man, possessing the due requirements, before any other candidate.[13]　　(Rulers Strictly Out of the Masses)

これらアレゲニ台地を越えて来た西部の開拓者達に，民主主義の正しい実現を期待するところにも，前にふれたジャクソン流に相通ずるものがうかがえる。

その意味において，リンカン（16代），ジョンソン（17代），グラント（18代），ガーフィールド（20代）のような，労働者，技師など，大衆の中から進み出た大統領こそ，彼にとって意義ある存在であった。

相互の信頼感から，服従と愛着の気持を自然に発生させることこそ統率者に必要な資格であった。1860年作の2行詩 Thought（所感）は次のように訴えている。

> Of obedience, faith, adhesiveness;
> As I stand aloof and look there is to me something profoundly
> affecting in large masses of men following the lead of those
> who do not believe in men.[14]

また「民主主義」本然の偉大性は，鳴り物入りの宣伝にもかかわらず，未だに歴史的に設定されず，記述もされていない点で〈自然〉の弟分にあたると言っている。

It (注=Democracy) is a great word, whose history, I suppose, remains unwritten, because that history has yet to be enacted. It is, in some sort, younger brother of another great and often-used word, Nature, whose history also waits unwritten.[15] (Democratic Vistas, ll. 940-3)

ホイットマンの生存した19世紀は，17世紀の合理主義，18世紀の知的，社会的啓蒙活動を受けた経験主義の時代である。彼は物象界の目ざましい発見，発明に対応しながら，ルネッサンス的な個人の価値意識を呼び起こしていた。「草の葉」の中の第一人称 "I" は，「人称を超越した私」(generic "I")[16] であり，しばしば実際のホイットマンよりも強力な存在となっている。それは民主主義への信念を確立させるような品性，資質を潜在せしめている "I" である。かく「あるべき」，「あるであろう」アメリカ人，世界人を語りかける "I" である。

彼の思想に明らかに反映されている視座としては，次の四つが掲げられる。[17]

(1) 先験的な改革方式にしたがい，歴史を無視する立場に立つ進歩主義の哲学

(2) ルソーの革新的所論に示されている人間生得の善の信仰と自然の理想化

(3) ドイツ哲学の観念論，とくに矛盾相克を越え神聖な目的に向って開現する宇宙意識を説くヘーゲル主義

(4) 宇宙理性からは独立するが，歴史的な進化の過程によって決定される実在たる自然についての科学的概念

これらの諸要素の混在が，ときには彼の作品に曖昧性をもたらすことがある。[18] 彼の中には対立する一切のものが包蔵されて，それ自体一つの全体世界を形成し，その「草の葉」は燦然たる一大交響詩として，調和的な諸楽章を奏(かな)でている。Eduard Bertz はその所信を述べ，ホイットマンは「明確にして哲学的な世界展望をそなえ，筋道立った〈科学的信仰〉(scientific religion) の創設者」[19] たらんとした詩人であると紹介している。いわゆる共産主義者タイプの人間ではないが，その純粋に創造的で進歩的であり，平等と労働を賛美した点からみて，1937年，D. Mirsky は，「疑いもなく社会主義の詩の先駆者である。」[20] と言っている。

娼婦のような〈社会の除者(のけもの)〉(outcasts of society) に対する〈法の強行〉(law-enforcement) や〈刑罰制度〉(penal system) にはかなり批判的であった彼は，反面牧師などの偽善行為に関しては苛責しなかった。ジャーナリズムで活躍していたホイットマンは当然市政の〈腐敗〉(corruption)，〈汚職〉(graft) を糾弾(きゅうだん)し，美しい公園の増設，立派な病院の施設・サービスの大衆化に力をいれた。

政治的には，当時の三大政党，〈民主党〉(Democrats)，〈共和党〉(Republicans)，〈アメリカ国民党〉(Native American Party)（別名 "Know-Nothings"）のうちの〈民主党〉，そのうちでも企業者支持，奴隷制支持の保守派に対して進歩派の中核メンバーであり，奴隷制反対であり，〈拡大社会経済民主主義〉(greater social and economic democracy) を主唱した。現実の政府には生涯不信感を示し，実際政治には幻滅感を味わっていたが，いろいろな方面で社会奉仕につくした，たいへん活動的な市民であった。[21]

Richard Chase が指摘しているように，[22] Democratic Vistas は Matthew Arnold (1822-88) の書いた *Culture and Anarchy*（文化と無秩序）のアメリカ版とも云えるもので，無秩序状態のうちに自国の現在の危機を感じ，単なる法制の仕組みによるよりも活発で前進的な理念がいきわたることに救いを見出そうとし，中堅階級に信頼した点，また物質文明の進歩と低俗文学の大量進出による道徳の退廃を憂え，詩と宗教の果す役割を高く評価した点において共通していた。「詩は〈人生の批評〉(criticism of life) なり。」と喝破したアーノルド！　そして人類の指導者であり，教師となることをもって詩人の役割りとしたホイットマン！

「インドへの航路」(Passage to India) (1863) の第1節にも告げられているように，当時のアメリカとしては，国際交流の上で現代の月世界探検にも比せられるべき三大盛挙があった。

Our modern wonders, (the antique ponderous Seven outvied,)
In the Old World the east the Suez canal,
The New by its mighty railroad spann'd,
The seas inlaid with eloquent gentle wires;[23]

ヨーロッパとアジアを結ぶ水路，スエズ運河の開通（1869年），北米大陸にかけわたされたユニオン・パシフイック，セントラル・パシフイック両鉄道の完成，[24] 大西洋，太平洋海底電線の敷設。これらは往昔の重々しい「世界七不思議」を陵駕するものであり，ヨーロッパ，北米，アジアは結合されて一つになった。

このとき，ホイットマンは立って過去に呼びかけ，霊魂の航路を説き，〈自然〉と〈人間〉の完全な融合，世界人の兄弟愛を歌うのである。

〈社会的連帯責任〉(social-solidarity) や，全人類のための〈世界的市民精神〉(world-citizenship) を強調しているものとしては，Calamus（カラマス）篇の中の諸詩，またそれらにつづく主要な詩 Salut Au Monde（世界万歳！）や Song of the Broad-Axe（大斧（おおおの）の歌）などが挙げられる。

民主主義の詩人であり，したがって最もアメリカ的な文学者の一人であった彼は，予言者，先駆者，反逆者であり，また烈しいヒューマニストである。自然で，土俗的で，前向きの姿勢をもった彼の詩風の系統は，ウイリアム・カーロス・ウイリアムズから現代のビートニックスにいたる人たちに引き継がれ，現代アメリカ詩の弾力的支柱となっている。[25]

William Douglas O'Conner 著，*The Good Gray Poet*（善良な白髪の詩人）の中の逸話によると，ソロー (Henry David Thoreau) はホイットマンと対談したあと，詩人が時代の博大な新精神と全アメリカを要約したような存在であることを知り，「彼こそは民主主義だ。」("He is Democracy!") と感動的に述べている。

彼の生涯の思索の結晶である「草の葉」は，人類永遠の課題である〈世界民主主義〉の達成を現在もなお強力に訴えつづけている。

× × × × ×

第1部　Comradeship

「浮浪者と罷業の問題」(The Tramp and Strike Questions) を論ずるホイットマンは，旧大陸に見られると同様な，貧困で，狂奔し，満足せず，放浪的で低賃金にあえぐ人々，また財貨の影にひそむ〈強奪〉(rapine)，殺人，非道，裏切り，〈豚のような強欲〉(hoggishness) に慨嘆する。またボストン族の血の通わぬ〈ユニテリアンの教義〉(Unitarianism) や，知識偏重の社交的ミイラ族の集いを軽蔑する。そして，政界の将来に広大な影響を及ぼす問題として，抽象的な民主主義の論議ではなく，社会的，経済的機構，雇傭者による労働者の取り扱い，〈貧困問題〉(Poverty Question) が真剣に解明されるべきであるとする。彼は合衆国のデモクラシーは自然のように尽大な解毒力をもった胃の腑であり，いろいろな病菌をもった食物も消化吸収して滋養物に化してしまうのだと楽観する。かかる救世的役割は，貧困な，下積みの人々がもつ〈崇高な美徳〉(sublime virtue)，〈適格性〉(eligibilities)，〈英雄的資質〉(heroism) に期待される。そして「かまれた傷は，同じ犬の毛を用いてなおせ。」という療法上のモットーが引用される。[26]

社会の道徳的な危機にあたって期待される真の国民精神，正銘の連帯は，成文法，私利，金銭的或は物質的な諸目的によってではなく，精神や感情の力によって一切のより小さなより限られた差別を熔融する，熱烈にして巨大な〈理想〉(IDEA) なのである。[27]

〈人民〉(People) は本来破格であり，乱雑で，その罪業もふかく，躾けも良くない。彼等は巨大な大地それ自身と同様に矛盾と不法に満ちていて，在り来りの韻律法ではとらえられず，〈無限なるもの〉(the Indefinite) によって照射された宇宙的な芸術心だけが，その多様で大海のような諸特質を表現できるのである。民主主義には〈粗野で草深い精神〉(the rude rank spirit) が所属する。しかも一旦緩急あれば，計りがたい潜在力や才能にめぐまれたこの人民こそが頼むに足る存在なのであり，和戦両様の場においても大言壮語する英雄や，上流の族（やから）を陵駕する偉大性を発揮して歴史に残るのである。[28]

彼が民主主義をささえる精神，情感として南北戦争に参加した諸兵士のうちに見出したものを列挙してみよう。

自らの理想のために，自らその道を選び，闘い，死んでゆく〈人民〉。(The People, of their own choice, fighting, dying for their own idea,....)

〈敏捷性〉(alacrity) にめぐまれ，世界のうちでも最も平和を愛好する，善良な気質の民族。(....the, peaceablest and most good-natured race in the world,)

一個の人間としてきわめて独立心に富み，しかも比（たぐい）なき従順と服従を示す兵士達，長く病床にありながら端正で，宗教的な天性と忍耐心をもち，しかも美しい愛情をそなえた少年の勇士たち，[29]——不幸にして

ここの病院に運ばれて来た若者たちは，彼にとっては〈アメリカ〉それ自身であった。(Alas America have we seen, though only in her early youth, already to hospital brought.)

急速に近づく死を予知していても，まったく平静で，気高く高潔な態度をくずさないペンシルベニアの兵士。

封建時代の領主や，ギリシア人，ローマ人も対抗しえない，申し分のない美しさ，やさしさ，そして勇気を示す南北両軍の兵士達。

病院，野営，戦場と3年間にわたって600回以上の訪問ないし巡回を果したホイットマンは，その間8万から10万の傷病兵の精神や肉体の支えとなった。こうした終日，終夜にわたることもある看護と慰問の日々において，彼は合衆国の真の〈全体像〉(ensemble) と大きさを会得したのであった。[30] The Million Dead, Too, Summ'd Up.（同じく百万の死の総決算）[31] に登場する，意味深い「**無名**」(**Unknown**) の言葉を記念碑や墓石に刻んだ兵士達。彼等ののこした書かれざる，語られざる戦争の歴史が「草の葉」の中で発光する。また，堅実で反省的な一般市民の努力も高く評価されねばならない。

世の中には一半の孤立する〈個人主義〉(individualism) があるだけではない。他の一半の各種族を集合し，連結し，融合させて仲間とし兄弟とする〈粘着性あるいは愛〉(adhesiveness or love) がある。この両者は，人間あるいは国家の唯一至高の教導者たる宗教によって，その誇るべき物的組織に生気を吹き込まれる。なぜなら，畢竟(ひつきよう)民主主義の精髄には宗教の要素があるからである。(For I say at the core of democracy, finally, is the religious element.) そこには新旧一切の宗教がある。美と支配力を手にしたいかなる目論見(もくろみ)も，この最良にして最新の精神的結実を伴うことなくしては前進し得ない。

また，民主主義をむしばむものとしてつぎの諸要因が挙げられている。〈ひねくれた悪行〉(perverse maleficence)，〈病的な気分〉(sickly mood)，一般の人間性にみられる粗野で欠陥の多い気質。

無知，軽信，不適格，不器用，無能力，そして非常に低劣で貧弱なものなどの一切の見本と巨大な集積。[32]

人類の諸機構に巣食う緩慢性と化石状態。

ここに〈革新家や革命家〉(reformers and revolutionist) の登場が不可欠となる。政治や道徳に正しい自覚をもたらすために，煽動やかなり冒険的な不法行為が空気の流通のように作用する。[33] しかし一旦自由が確保されると，間接的にしかも着実に，善意や道徳，最良の法規といったものが付随してくるのである。

Inscriptions（銘詩）篇の Poets to Come（来るべき詩人たち）の中で，

> But you, a new brood, native, athletic, continental, greater than
> before known,

（土着の，強壮で，大陸的で，かって知られたどの種族よりも偉大な新しい種族，）
と呼びかけられる国民。

Song of the Open Road（大道の歌）では，力，自由，大地，四大と共に前進するのは，健康，反抗心，快活，自負，そして好寄心をそなえた国民である。

> Allons! with power, liberty, the earth, the elements,
> Health, defiance, gayety, self-esteem, curiosity; (ll. 127-8)

Democracy は既存制度の破壊，攻撃に終始するものではなくて，新しい〈同志愛の制度〉(the institution of the dear love of comrades) を樹立するものである。Democracy を表題にかかげた詩，For You O Democracy (Calamus 篇) においても，

> .....
> With the love of comrades,
> With the life-long love of comrades.
>
> .....
> By the love of comrades,
> By the manly love of comrades.

と，〈同志愛〉は繰り返され，神聖な吸引力をもった国土，離れないように腕をお互の首に巻きつけ合った諸都市が，デモクラシーの祭壇の前に捧げられる。

G. W. Allen の指摘しているように，1860年の「草の葉」第3版では *No.* 5 となっていたこの詩は，an

allegory of democratic brotherhood とみなされるカラマスの根や葉から，一般的な〈民主主義の象徴〉(democratic symbolism) を展開する試みを行なった。それは合衆国を形作る〈新しい友情〉であった。40歳のホイットマンの鋼版印画をのせたこの第3版には，Calamus とともに，22の詩群をまとめた *Chants Democratic*（民主主義賛歌）の詩篇もあった。

1876年，ホイットマンは，*Leaves of Grass* と *Two Rivulets* を Centennial Edition（独立宣言百年記念出版）として2巻もので刊行した。その *Two Rivulets* の脚注のところで，彼は *Leaves of Grass* を世におくる意図として，生生として脈打つ果てしなき愛と友情の永劫の流れを，老若男女（現在と将来の読者）の心に注ぎこむことを挙げている。

> I also sent out LEAVES OF GRASS to arouse and set flowing in men's and women's hearts, young and old, (my present and future readers,) endless streams of living, pulsating love and friendship, directly from them to myself, now and ever. To this terrible, irrepressible yearning, (surely more or less down underneath in most human souls,) this never-satisfied appetite for sympathy, and this boundless offering of sympathy—this universal democratic comradeship—this old, eternal, yet ever-new interchange of adhesiveness, so fitly emblematic of America—I have given in that book, undisguisedly, declaredly, the openest expression. [34]

この万人の胸底にひそむ，はげしく，抑え難く，厭くことのない共鳴への渇望。古くして新しい永遠の友情の取り交しであり，アメリカの象徴たるにふさわしい広大な民主的僚友愛——これこそが，てらわず，きっぱりとして明け広げな調子で，「草の葉」の中に表現されているのである。

「草の葉」の中心主題として，冒頭の Inscriptions において試みられているのは，Identity という自己の問題に解答をあたえることである。すなわち，個人とは何ぞや，その社会との関係やいかにということの究明であった。

> One's-Self I sing, a simple seperate person,
> Yet utter the word Democratic, the word En-Masse.
>
> (One's-Self I Sing, ll. I, 2)

（人の「自我」について，単独の分離せる人間について私は歌う，
しかも「民主主義」の語を，「民衆に伍して」の語を口にする。）

ギリシア，ドイツの新旧諸哲学の体系を学び，カント，フィヒテ，シェリング，ヘーゲルを知り，プラトン，ソクラテス，キリストと一歩一歩登頂していったホイットマンが，一切の形而上学の基礎でありまた究極のものであるとしたのは，都市と都市，国家と国家を吸引し結合する友愛であり人間愛であった。[35]

A Promise to California（カリフオルニアとの約束）では，強壮なアメリカ流の愛 (robust American love) を教えることが約束される。

To the East and to the West（東部に，また西部に）では，東西の諸州に，北方のカナダ人に，愛する南部の人に語られる。

> I believe the main purport of these States is to found a superb
> friendship, exaltè, previously unknown,
> Because I perceive it waits, and has been always waiting, latent in
> all men.[36]

（私はこれら諸州の本意は，以前には知られていなかった堂々たる友情を創始し，高揚することにあると信ずる。
なぜなら，私はそれがあらゆる人々のうちに潜在して待っていることを，いつも待ちつづけていることを感知するからだ。）

3行詩，To Forein Lands（諸外国に）では，アメリカの〈強健な民主主義〉(athletic Democracy) を解明するために彼の詩を捧げると記している。〈強健な愛〉(athletic love) が〈強健な民主主義〉を育成するのである。ホイットマンは偏狭な愛国詩人ではなく，全人類のための詩人であった。

×　×　×　×　×

第2部 健全なる Womanhood と Maternity

Democracy は B. ラッセルも指摘しているように,[37] その言葉，機能，ともにギリシアに発祥したものであり，それまでの〈君主政治〉(monarchies)，〈神権政治〉(theocracies) や〈貴族政治〉(aristocracies) に代って，始めて市民の声を政治に反映させる制度ではあったが，婦人参政権をふくめた現在の形式を地につける迄には，プラトンの提唱以来幾多の紆余曲折があった訳で，偉大な母性を賛美し，その必要資格として健全性を要請しつづけたホイットマンの声の大きかったことはいうまでもない。ワイオミング州を嚆矢として，この婦人参政権問題が全米的に登場したのは，彼の死の2年前，1890年であった。また当時，Thomas H. Huxley (1825–95) は同じ男女平等の立場にたって，息子達と同様娘達にも〈自然科学〉(physical science) を施して，仕事の分野でも男性の良き協力者となることを期待している。この英国の進化論者は女性の商品化を憂えて，"They shall not be raised as mantraps for the matrimonial market." と痛烈に述べている。

ホイットマンは民主主義の理想の実現について，男子は勿論婦人にも同様に大きな期待を寄せている。

> The idea of the women of America, (extricated from this daze, this fossil and unhealthy air which hangs about the word *lady*,) develop'd, raised to become the robust equals, workers, and, it maybe, even practical and political deciders with the men—greater than man, we may admit, through their divine maternity, always their towering, emblematical attribute—but great, at any rate, as man, in all departments; or, rather, capable of being so, soon as they realize it, and can bring themselves to give up toys and fictions, and launch forth, as men do, amid real, independent, stormy life. (Democratic Vistas, ll. 822–30)

（アメリカ女性の見識は，（〈淑女〉の語にまつわりつく眩惑や，時代おくれの不健康な空気から脱出して）発展し，高められて，男性と対等の立場に立つ強健な働き手となり，また実際的，政治的問題の決定にあたって男性とともに加わることもあろう。——その神聖な母性と，常に気高い象徴的特質をたずさえて男性にもまさる女性は——ともあれ，あらゆる部門において男性と同様に偉大である。あるいは，むしろかかる自覚をもてばすぐにそうなり得るわけなので，玩具や小説をもてあそぶことをやめれば，男性のように，現実の，自立した，嵐の生活場面の真只中に進出できるのである。）

彼はよく〈完全な男女〉(complete men and women) という言葉を口にするが，若き女性には〈品位のある人柄〉(personal dignity) と〈健康で愉快である〉(healthy and bracing) こと，〈汚点のない性格〉(unstain'd character) をもつことを求め，〈精神的に進歩していく機会〉(opportunities for mental improvement) を得るように奨めている。また老年の婦人には，〈幸福で明るい気質〉(happy and sunny temperament) や生得の品位をもちながら，〈家庭内の取り締りの役〉(domestic regulator)，〈もめごとの決着者〉(settler of difficulties) となりうる資質を望んでいる。

家庭婦人としての理想像はつぎのように懇切に描かれている。

> Never abnegating her own proper independence, but always genially preserving it, and what belongs to it—cookings, washing, child-nursing, house-tending—she beams sunshine out of all these duties, and makes them illustrious. Physiologically sweet and sound, loving work, practical, she yet knows that there are intervals, however few, devoted to recreation, music, leisure, hospitality—and affords such intervals. (Democratic Vistas, ll. 1176–82)[38]

（自分に相応した独立の気構えは決して捨てないで，しかも常に気持よくその独立とそれに付随するものを保っている——調理，洗濯，育児，家事の切盛り—— 一切の仕事は，彼女が手をとおすと快活な気分にみちあふれ，立派な成果をおさめる。身体は美しくととのっていて健康であり，仕事を好み実際的である。しかも適宜，わずかの合間をみて，レクリエーション，音楽，余暇の善用，饗応などに時間をさくことの良さを知っており，そういう余裕をもち合わせている。）

A Song of Joys（喜びの歌）の中では，80歳を越した尊敬すべき母親の幸福と，その円熟せる婦性の喜びが称えられる。

この種の立派な女性には老若を問わず，変らない雰囲気が保たれ〈共通の光輪〉(common aureola) が伴うものである。

こうしてホイットマンは，女性が実際生活や，政治，選挙権などの競争場裡に立ち入るという問題が当然のこととして具体化されるよう提案する。機は熟してきたのである。

The day is coming when the deep questions of woman's entrance amid the arenas of practical life, politics, the suffrage, &c., will not only be argued all around us, but may be put to decision, and real experiment.　(Democratic Vistas, ll. 1207–10)

より壮大な共和国の未来をになう，強力で敏捷な後継者たちへの期待を表現しているものとしては，Song of Myself（私自身の歌）につぎの２行がある。

On women fit for conception I start bigger and nimbler babes,
(This day I am jetting the stuff of far more arrogant republics.)　(ll. 1006, 7)

この長詩の冒頭で，"I celebrate myself, and sing myself," と自己宣揚の主題を紹介した彼は，ここでは未来への可能性を孕(はら)む健全な女性たちに期待する。republics と複数形になっているのも，「一つの宇宙，ウオルト・ホイットマン」(Walt Whitman, a kosmos) として原始的な合言葉を語り，民主主義の合図をおくる彼としては当然のスケールであろう。同じ条件で万人に符合するものだけを受け入れるのが彼の身上である。[39]

民主主義の発展のため，とくに〈新世界〉(New World) を誕生させる家系をうみ出すために，民主主義や近代性を表白する〈文学〉(Literatures) や立派な〈教師〉(Teacher) と共に，完全な〈女性〉(Women) の新しい種族が宣揚されねばならない。

With these, and out of these, I promulge new races of Teachers, and of perfect Women, indispensable to endow the birth-stock of a New World.　(Democratic Vistas, ll. 65–7)

1856年，1860年版の Leaves of Grass では〈完全で自由な個人〉(perfect and free individuals) を主題としていた彼は，1867年版では民主主義の〈偉大なる理念〉(the great Idea) を歌うことのできる詩人に成長し，〈民主主義の陣痛の歌〉(the Song of the throes of Democracy) を歌い，〈母なる民主主義〉(Mother-Democracy) と〈姉妹の諸州〉(Sister States) への愛の賛歌が高々とうたわれている。前にも触れた南北戦争への参加体験による開眼であろう。

(O mother! O sisters dear!
If we are lost, no victor else has destroy'd us;
It is by ourselves we go down to eternal night.)[40]　(Sec. 2)

民主主義による全き結合には，崩壊などありえないのである。

〈母〉,〈姉妹〉の語は，ギリシア語の metropolis (mother city—capital) の発想にも通じながら，比類なき真正の〈民主主義〉，活動的で慈愛にみちた〈アメリカ〉，またその雄大な〈自然〉，政治的共同体として離れがたき〈諸州〉を象徴する語として時折用いられている。

〈万人の母〉(the Mother of All) が反逆する人々に反抗の無用を説得する Virginia—the West（西の国—バージニア）

同じく Drum-Taps（軍鼓の響）篇の中の詩，The Centenarian's Story（百歳翁の物語）では，姉妹達，母親達の悲嘆の涙のうちに戦死し，敗北した若者ら，流血の中で洗礼を受け，うなだれる軍旗など，８月27日，英国軍上陸の日の戦闘が切々と語られる。

Thou Mother with Thy Equal Brood[41]（平等の子等をつれた御母よ）では，〈新世界の頭脳〉(brain of the New World) が〈現代〉(the Modern) の公式を示している。〈現在〉のみならず〈過去〉の積荷をのせた〈民主主義〉の船が帆走し（§４），〈普遍的な母性〉(general maternity) の表象がすべてのものの上に掲げられる。そしてその〈万人の御母〉(Mother of All) の不死の胸の中では，すべての娘や息子たちは常に平等であり，それぞれひとしく愛育される。（§５）

フランス国旗の三色（トリコロール）に象徴される〈自由〉(liberté),〈平等〉(égalité),〈友愛〉(fraternité) は奇しくも「草の葉」の中で終始強調される標語であるが，男女の平等を掲げているものとしては，Starting from Paumanok（ポウマノクを出発して）の第12節に次の２行がある。

I will effuse egotism and show it underlying all, and I will be the
bard of personality,

And I will show of male and female that either is but the equal
of the other,[42]

（私は自己中心主義をひろめよう。それが万物の根底にあることを示そう。そして個性をうたう詩人となろう。
また，男性も女性も相互に全く対等の存在であることを示そう。）

完全な母によって健やかに産まれ育てられたホイットマン！　女性と男性の国土，アメリカ！　この国は心霊的なものを解明する女性のいる処であり，〈私の女王〉(my mistress)，〈霊魂〉が登場する舞台である。

× × × × ×

第3部　Nature 信仰

前出の T. H. ハックスリーにも，科学者的観点から書かれた著書，Man's Place in Nature があるが，ホイットマンの Democracy は自然の匂いがすると言える。

Specimen Days（自選日記）のしめくくりの部分に，Nature and Democracy—Morality（自然と民主主義——道徳性）の一篇がある。彼はここで，〈アメリカ民主主義〉(American Democracy) のいわば精髄を形成するものとして，戸外の日光，空気，もろもろの成長物，農場の光景，動物，野原，樹木，小鳥，闊大な空などの〈自然〉との接触をあげている。

道徳性については，彼は，Marcus Aurelius の "Virtue, what is it, only a living and enthusiastic sympathy with Nature?" の言を引用しつつ，真の詩人の果すべき役割も，人々の陥りがちな迷妄の中での彷徨と，病的な抽象的概念に取り付かれることからの脱却を促し，神聖にして掛替えのない〈自然〉の具象性に復帰せしめることにありとする。

工場，作業場，店舗，事務所，交通の頻繁な往来でも，人家の密集している市街でも，人々はみな〈自然〉の活力が必要なのだ。さもないと衰退し，青ざめてしまう。こうして彼は，合衆国の〈民主主義〉を繁栄させ，壮大にする要素として，〈民主主義〉それ自体を支えていくものとして，——健康の要素とも，美の要素ともなり——〈新世界〉全体の政治，穏健性，宗教そして芸術の真の基底となるものとして——〈自然〉の要素の主要な役割りが不可欠であると思うのである。

I conceive of no flourishing and heroic elements of Democracy in the United States, or of Democracy maintaining itself at all, without the Nature-element forming a main part—to be its health-element and beauty-element—to really underlie the whole politics, sanity, religion and art of the New World. [43]

宗教面では，彼の生育した家庭環境からみて，クエーカー教の影響力が考えられるが，[44] 東洋の諸宗教にも深い感銘を示していたと言える。彼の信奉する宗教はいわばホイットマン的世界教であり，換言すれば自然崇拝教ということであろう。個々の事物がそのところを得てこそはじめて宇宙が規則的で完全な運行をつづけることができるのであり，草の葉一枚にも星宿の公転に劣らない意味がやどるのである。

I believe a leaf of grass is no less than the journey-work of the stars,
(Song of Myself, § 31, 1. 663)

また全体の結構の壮大と美麗とは，その小さな各部分部分に潜在するものなのである。

I do not doubt but the majesty and beauty of the world are latent
in any iota of the world, (Assurances, 1. 3) [45]

こうして自然こそは民主主義の真髄を体現するものである。それは完全であると同時に神聖なるものとして，宗教的には〈天〉(Heaven) となり，〈神〉(God) と一体となる。かかる真の意味の〈神〉は，現世的には一人一人の理想的な人間に姿を借りて存在する。

Democratic Vistas の書出しでは，〈新世界〉の政治と前進は〈自然〉の多様性と自由性に学ぶべきであるとして，次のように書かれている。

As the greatest lessons of Nature through the universe are perhaps *the lessons of variety and freedom,*[46] the same present the greatest lessons also in New World politics and progress,

既にふれた彼の晩年の随筆，Democracy in the New World において，共鳴すべき示唆として Charles Kingsley の次の言葉を引用している。なおこのキングズリーは，彼と同年齢の英国の宗教家，文学者である。

"The ideal form of human society is democracy. A nation—and were it even possible, a whole world—of free men, lifting free foreheads to God and Nature; calling no man master, for One is their master, even God; knowing and doing their duties toward the Maker of the universe, and therefore to each other; not from fear, nor calculation of profit or loss, but because they have seen the beauty of righteousness, and trust, and peace; because the law of God is in their hearts."

〈神〉や〈自然〉に高く額をかざし，自らが支配者であり〈神〉でさえある自由人。〈神〉の法則を心に宿した彼等が，畏怖や損得からではく，正義と信頼と平和の美しさの何たるかを知るが故に，創造主への義務として果す個人の責任遂行——こうして形成される民主主義国家こそ道徳的に最も高貴な存在であり，地上における神の王国である。ここでホイットマンは，かかる理想に立脚した信仰を守り抜くことを訴えながらも，母国の現況，アメリカ民主主義の実情に慨嘆している。

To this faith, founded in the ideal, let us hold—and never abandon or lose it. Then what a spectacle is practically exhibited by our American democracy to-day!

民主主義の発展にとって必須の偉大なる個性，とくに〈英知〉(Wisdom) は，自然に帰一することによってのみ体得される。即ち，最上の人物を育てる秘訣は戸外で成長し，大地とともに食べそして眠ることにあるのだと伝授される。そして〈英知〉の本性ともいうべきものが説き明かされる。

Here is the test of wisdom,
Wisdom is not finally tested in schools,
Wisdom cannot be pass'd from one having it to another not
　　having it,
Wisdom is of the soul, is not susceptible of proof, is its own proof,
Applies to all stages and objects and qualities and is content,
Is the certainty of the reality and immortality of things, and the
　　excellence of things;
Something there is in the float of the sight of things that provokes
　　it out of the soul. [47]　　(Song of the Open Road, ll. 76–82)

（ここで英知が試みられる，
英知はつまるところ学校で試みられはしない。
英知はそれをもつ者からもたない者へと手渡されるわけにはいかない。
英知は霊魂に属するもので証明できるものではなく，それ自身が証明である。
すべての段階，対象，性質に適用されて，しかも満足なものである。
それは事物の実在と不死性，事物の卓越性を確認する。
事物の姿が眼にうつるとき，そこには何物か魂を刺戟して英知を喚び起すものがある。）

このSong of the Open Road（大道の歌）は W. S. Kennedy の推測では，George Sand の *Consuelo* という小説の中の文章，"What is there more beautiful than a road?...) からインスピレーションを感じて作られたことになっているが，1856年の第2版，1860年の第3版では "Poem of the Road" という題であったのが，1867年以降現在の題をもつようになったのである。冒険心と将来への自信感にあふれたこの作品の中の "road" は民主主義の大道として受けとられるように思う。第2節の You road I enter upon and look around,...，第15節の Allons! the road is before us! などに見える "road" は，多くの可能性を秘め未来の発展を約束するデモクラシーの〈道〉であろう。ホイットマンは Camerado と呼びかけ手をさし伸べる。

彼は世界におけるもっとも多産な霊案者の一人であった。晩年の友人，カナダの精神病学者である Dr. Richard Maurice Bucke は，ホイットマンの〈神秘主義〉(mysticism) にふれ，彼こそは常人のもつ〈意識〉と〈潜在意識〉に加えて，第三の意識——〈宇宙的意識〉(Cosmic Conciousness) をもった類いまれな人間

であると述べている。彼の独自の神秘主義には，バラモン教や道教など東洋的な色彩が反映しており，萬有神教的，求心的な「観心観法」の思想がうかがわれる。

この〈宇宙的意識〉によると，宇宙は神であり，神は宇宙であることが示される。近代の〈汎神論〉(pantheism) の父と言われる Spinoza によれば，自然の存在の中に神が証明されており，創造者と被創造者は一体である。そして神が分割しえない存在であるように，自然は遍満する合一性で連結されているのである。

石，植物，動物の中に神を照察し，自然の法や道徳の法の中に神を見る Fichte は，形相が常に<神の存在> (the Supreme Being) を人間から隠してしまうことを嘆ずる。こうして〈汎神論〉と〈神秘主義〉は分離しがたくなる。

Kosmos[48] (宇宙) と題する詩においては，宇宙即ち〈自然〉はもろもろの不同性を包含し，〈実在論〉(realism)，〈唯心論〉(spiritualism)，〈知性〉(the intellectual) の〈三位一体的均整〉(triune harmony) を維持するものとなっている。

396 の詩を数える「草の葉」(Centenary edition)。その 37 % 近くの詩の中に姿をあらわす海のイメージ (sea, ocean, ship, sail)。[49]「魚の形をした島」(Paumanok) を取り巻く海。その岸辺で，オシアン，ホーマー，旧新訳聖書，古代インドの詩などを読んだ海。〈海〉はホイットマン自身の多面性を示すことにより彼の分身的存在であり，〈神の海〉であった。

O daring joy, but safe! are they not all the seas of God?

(Passage to India, § 9, 1. 254)

彼は，社会を改造し民主化するための内面的で枢要なる原理として，〈宗教的民主主義〉(Religious Democracy) を語る。

Facing West from California's Shore（カリフオルニアの岸より西方を望みて）の中で，

I, a child, very old, over waves, towards the house of maternity,
the land of migrations, look afar,[50]

とうたうホイットマンは，人類発祥の地としてのアジアの存在に特別の関心を寄せている。

戦場からもどって来た〈自由〉(Libertad) の頭部に輝く光輪，常に建設的で常に将来の見通しをもつ共和国がうたわれる By Blue Ontario's Shore（青きオンタリオ湖の岸辺にて）では，国家の中の国家を確証するような詩人の形質をはじめに形づくるものは，大地，水，動物，樹木などであることが説かれる。

Roots and Leaves Themselves Alone（根と葉，それらだけが）は，人間と自然の合体の中に〈愛〉が成長することを歌った詩である。

Breezes of land and love set from living shores to you on the living
sea, to you O sailors!
.....
Love–buds put before you and within you whoever you are,
Buds to be unfolded on the old terms,
If you bring the warmth of the sun to them they will open and
bring form, color, perfume, to you,
If you become the aliment and the wet they will become flowers,
fruits, tall branches and trees.[51]

（陸地の微風(そよかぜ)と，息づく岸辺からの愛は，息づく海上にいる君達に捧げられる。
おお船人よ！
.....
愛の芽生えは，君達が誰であろうと，君達の前にまたその内部にみられる。
古いしきたりによって開花するはずの蕾が。
もし君達が日輪の暖みをもたらすなら，彼等は開花し，形を，色を，そして
香りをもたらすだろう。
もし君達が，栄養となり，しめり気ともなるならば，彼等は花開き，実を結び，
枝をひろげて高い樹木に育つだろう。）

ホイットマンは友人の H. L. トローベルに，「アメリカで最善のものは，最善の世界主義である。」と語っている。Song of the Exposition（博覧会の歌）の第1節では〈新世界〉の教訓が示されている。

After all not to create only, or found only,
But to bring perhaps from afar what is already founded,
To give it our own identity, average, limitless, free,
To fill the gross the torpid bulk with vital religious fire,
Not to repel or destroy so much as accept, fuse, rehabilitate,
To obey as well as command, to follow more than to lead,
These also are the lessons of our New World;

（結局のところ，創造したり基礎づくりをするだけではなくて，
既に見出されているものを，遠くから運びこむこともあろう。
それに我々の本体たる，平均性，無限性，自由性をあたえ，
無知で無感覚な総体をば，生気をあたえる宗教的霊感によって充満し，
反撃し，破壊するよりも，受容し，融合し，修復することに一層の力を注ぎ，
支配するとともに服従し，指導もよいがより多く追随すべきである。
これらがまた〈新世界〉の教訓である。）

広闊な天地には，永遠に草は生(は)え茂り，はてしなく雨は降り，地球は休みなき回転をつづける。

Long and long has the grass been growing,
Long and long has the rain been falling,
Long has the globe been rolling round.　　(§ 1, ll. 12–14)

×　×　×　×　×

〔結論〕 Democracy の理想と機能

既述の The Tramp and Strike Questions と同じく Collect 篇にある Freedom によって彼の自由論を考察してみよう。

宇宙全体が絶対的な〈法〉(Law) である。この〈法〉の下においてのみ，自由はその全活動と奔放性を勝ち得るのである。自覚の欠除している大多数の人々は，自由をもって〈法〉から逃れることと考えがちであるが，こんな自由は不可能である。〈自由〉は地上のあらゆる富にもまさって貴重である。教会万能主義からうまれる苦痛にみちた制約や憐むべき偏狭さからの自由，政治にまつわる党派の結託やありふれた因習からの自由。とりわけ賞揚されるべきものとしては，悪徳，悪習，過度の食欲などの暴君的な支配の手から〈自分自身〉(One's-Self) を救出する，一般的な自由がある。かかる解放，自由を獲得してこそ，真の民主主義が示す高処(たかみ)に迄も到達できるようになる。

Strange as it may seem, we only attain to freedom by a knowledge of, and implicit obedience to, Law. Great—unspeakably great—is the Will! the free Soul of man! At its greatest, understanding and obeying the laws, it can then, and then only, maintain true liberty. For there is to the highest, that law as absolute as any—more absolute than any—the Law of Liberty.[52]

（奇妙に思われるかもしれないが，我々は〈法〉の何であるかを知り，それに黙々として服従することによってのみ自由に到達する。偉大なる——名状しがたいほど偉大なる——ものが〈意志〉である！人間の自由な〈魂〉である。その意志が最も偉大なる状態で，法を理解し遵守するとき，はじめて真の自由が保たれる。即ち，高き意志をそなえた人々にこそ，いかなるものにもまして絶対的な法——〈自由の法〉が存在する。）

賢明なる人士は，〈自由〉こそは力強き〈法の中の法〉(Law of Laws) であることを，即ち自覚する意志，部分的な個人の法を，普遍的で永遠なる無意識の法に融合し，結合するきまりであることを知るのである。この後者の無意識の法こそは〈時〉を駆け抜け，歴史の中にひろがり，不滅であり，物象界の一切に道義的目標をあたえ，人間生活に最終的威厳をあたえるものである。

政治その他一切の支配関係が目的とするところは，（勿論，警察による生命・財産の安全は保持され，基

本法や慣習法，そしてそれらの管理も常にまず整然としているものとして，）

> ..., not merely to rule, to repress disorder, &c., but to develop, to open up to cultivation, to encourage the possibilities of all beneficent and manly out-croppage, and of that aspiration for independence, and the pride and self-respect latent in all characters.[53]

（単に統治したり，無秩序を抑止したりするだけではなくて，博愛心に富み男性的である一切のものの出現や，万人の性格に潜在している独立の意欲，誇りや自尊心を発揚し，育成し，激励することである。）

ついで〈平等〉の問題を考えるにあたり，人類はキリストが彼等のために〈道徳的，精神的〉(moral-spiritual) 領域に姿をあらわして示したところの絶対的な霊魂を考察しなければならない。それは超絶的なものであり，（生命にも似て）等級づけのできない状態で各個人に授けられており，知性徳性の有無，地位身分の高低などは一切関与しない。また他の分野においても，これと符節を合わせつつ民主主義が果さねばならないことがある。[54] 即ち国民の個々が共同生活者としての集団を形成しながら，しかも個別の完全な自由を保証され，さらに世俗的な繁栄や幸福，進歩発展のための平等な機会があたえられ，市民権が守られることなどが民主主義政治の志すところである。また選挙権，投票権などの政治参加の問題に関しては，個人としてもまた全体としても，広汎にして基本的であり，しかも普遍的な共通綱領の上に立たねばならない。

民主主義は壮大な物的個性だけではなくて〈不滅の霊魂〉(immortal souls) のために，万人に公式をあたえ，彼等を振い起こして訓練するための最良最適の手段である。そして民主主義自体はというと〈自然〉と同様，特別の価値をもつものではない。参政権にしても，相互の屈辱感を無用のものとして人々を対等の地盤に立たせることにより，多分数世代を要するだろうが，十分に成長発展した男性女性を養成する役割りを果すのである。この民主主義の方式こそは国家の前進に安定性をあたえ，来るべき時代において安全性と保存力をもつ唯一のものである。[55]

民主主義はもっとも厳格にしてしかも広大な性質をもつ〈法〉である。法を無視し，勝手気随にやることとは凡そ縁遠い。生理的な力や肉体についての法を〈精神の法〉(law of the spirit) におきかえて行く最高の法である。それは動かしがたい宇宙の秩序たる法であり，既述のように一切のものの法，〈法の中の法〉であり，劣をもって優に換えていく継承の法である。自治は時が熟するのを待たねばならない。(... self-government must abide its time.) 傑出せる人物は，大衆のうちに所属することにこそ偉大性と健全性をみる。(The master sees greatness and health in being part of the mass; ...) 民主主義は神聖にして広大かつ一般的な法則である。この主義こそ遠近の多様なる諸国家を同胞として，一家族として結合する。〈自由主義者〉(liberalist) のもつ強みは，その教義が〈個別化〉(individualize) するだけではなくて〈普遍化〉(universalize) することを求めている点にある。ここに〈協同一致〉(Solidarity) という偉大な言葉が発生する。〈神〉(God) とその聖なる集合体である〈人民〉(People) を正当に認容すること，これが〈アメリカ民主主義〉のヨーロッパにおくる〈教示〉(lesson) である。彼にとってのアメリカは，世界国家の模型（モデル）であった。

その国の男性女性の両者のため最高の人間像を鋳直すことが必要であり，このための素材と示唆を提供することこそ，文学，詩歌，美術の重要な存在意義である。未来のアメリカの人間像に欠けてはならないものとして，道徳の形成に必須の要素，〈単純で，学者ぶらない良心〉(simple, unsophisticated Conscience) が考えられる。

〈個性〉(Personalism or Individuality) は，堂々たる共和政体下においてこそ妨げられずに枝を張り，最もよく繁茂する。この〈個性〉は Democratic Vistas の中心となった小論のタイトルであると同時に，民主主義の中核でもある。民主主義の達成は，成熟せる宗教や，教会その他のいかなる機構によっても終局的には不可能であり，この〈個性〉の分野においてのみ果される。自由平等を旗印とする民主主義において，譲りえない〈平均の原理〉(principle of average) を第一のものとするなら，この対蹠的な〈個性〉こそ第二の原理である。それは人間の自負であり自己凝縮である。生活の最高原理ともなり，アメリカの全体的機構を上手に動かすための〈平衡輪〉(balance wheel) である。現代の文明は，その宗教，芸術，学校の一切をあげて，要するに豊饒にして多様なる〈個性〉を育てるためのものである。[56]

ホイットマンは科学的思考を尊重するリアリズムの精神を堅持していたが，他方自我を礼賛し情緒を重視する点では，Norman Forester などの指摘する偉大なロマンチストの面をかね備えていた。

By the Roadside（路傍にて）篇の詩，Gods（神々）においては，偉大なる思想や英雄的行為とともに〈完全なる僚友〉(perfect Comrade) が神の座をしめている。「草の葉」にある二つの一行詩のうちの一つ，[57]〈平等〉(Equality) をうたった Thought（所感）では，自分と同じチャンスと権利を他人に与えることは自分を傷けるものではなく，他人が同じ権利をもつことが自分のその権利の所有に不可欠であるとの所信が表明されている。なお，既述の南北戦争を契機として，彼の民主主義において占められていた個人と全体との相互関係は，同時にアメリカ合衆国の統一という見地から諸州と国家との融合関係に代置されて考察されている。

ホイットマンは，〈普通選挙〉(general election) によってアメリカ第一流の天才が大統領職，国会議員などの主要な政治部局に出現するであろうとは期待していない。これらの政治家を選出する意図も，国民のために重要事項を思案し決定してもらうというよりも，未決の問題や方策についての多数の意思を表現するのに，最も確実にして実際的な方法なりとして行うことにある。したがって普通選挙は一般化するほど良くなるのであり，換気孔も活動の余地も十分広くしておくと一切が安全というわけである。

> As to general suffrage, after all, since we have gone so far, the more general it is, the better. I favor the widest opening of the doors. Let the ventilation and area be wide enough, and all is safe. (General Suffrage, Election, &c.)

今日の我々からみれば至極当然の論旨であるが，婦人参政権の問題もこれからという状況下における当時の卓見であり，民主主義の教典，「草の葉」を世に示した平民詩人の面目が躍如としている。

ホイットマンは，民主主義の精髄を簡潔にしかも細大もらさずに表現したものとして，リンカーンのゲッティズバーグ演説中に発せられた衆知の一句，「〈人民〉のための，〈人民〉による，〈人民〉の政府」，を当時早くも取り上げ高く評価していた。アメリカ統一の道を開いたこの第16代大統領の功績に深甚の敬意を表しながら……。

民主主義は自由主義と表裏の関係にある。そして合衆国の〈自由主義〉(liberalism) は，〈中流程度の財産所有者〉(middling property owners) の一集団の安定性と持続性を基底としてしっかりと築かれている。であるから，一見すると不親切で逆説的な論法のように思われるが，極貧者や無学者や失職者などは，民主主義にとっては不信と不満の対象なのである。

「実際的，活動的，世間的，蓄財的であり，さらに物質主義的ですらある性格」(a practical, stirring, worldly, money-making, even materialistic character) も，民主主義のために喜んで加えるべき性格である。極端なほどの〈事業エネルギー〉(business energy)，異常に近い〈致富欲〉(appetite for wealth) も結構である。それらは向上や進歩の一部となっており，豊かな生産，能力，活動，発明，機械の運用などもこれに伴う。

北方人のもたらす，事物を照らす太陽ともいうべき〈知性〉(intellect)，最後の激しい暴風両の場に際して錨の役を果す揺ぎなき〈公正の理念〉(the idea of justice)，また南方人から期待されるものに，昂然として自らの論証以外何物も受けつけない霊魂と，善悪を決する意志がある。また西方からは，熱血と筋力にめぐまれ，一切を受け入れて融合する深厚な品性をもった人物が姿をあらわす。

不断の攻撃精神，一般の賛同が得られなくても敢然として〈大義〉(cause) を志向する精神，自分に不利な証明や先例の中にあって初志を貫徹する努力，こうした特性に〈万歳〉(vive) がおくられる。

ときには才能もない無資格者が，〈腐敗した政党や選挙運動〉(corrupt rings and electioneering) によって政治の要職をしめることがあっても，それは〈海面の浮きかす〉(ocean's scum) のようなもので，その底に深く澄んだ水（一般国民）があればそれで結構である。国民あげての憤怒，激情，論争が満足以上の成果をもたらしてくれる。ここでホイットマンは，政治史上の最も崇高な部分，その絶頂となるところは，アメリカ国民の全員から産まれ出ているのだという彼の所信を披瀝する。[58] その最高の成果がアメリカの国民選挙なのである。

〈権勢を誇る者〉(sir potency) は墓穴の中に空しく朽ち果て，〈人民〉(People) のみは永遠に残る。またその継承される特質も連綿として絶えることがない。

政治上の民主主義は，アメリカにあって実際に活動している姿からみるなら，一切の邪悪の脅威は伴っても，第一級の人物を養成する〈訓練所〉(a training school) の働きをかねている。成功や目的達成はかなら

ずしも保証されなくてよい。何度も挫折し，何度も試みるのだ。時間は十分にあり，勝者は我々の後について来ればよい。世界史の主要部分から判断しても，正義は常に危険に瀕し，平和は絶えず落とし穴の縁を行く。

理想の社会は，完全な性格をそなえた大きな円であり，一切の凝集である。

Behold the great rondure, the cohesion of all, how perfect!

(Out of the Rolling Ocean the Crowd, 1. 9)[59]

平等にして，自然のままで，神秘的な〈合衆国〉(Union) は，〈神〉の所領たる国土であり，〈霊的世界〉(Spiritual World) である。〈法〉の空には，〈調和〉，〈進化〉，〈自由〉の三つの出生の星が輝く。[60]

To a Foil'd European Revolutionaire（失敗したヨーロッパの一革命家に）の詩では，幾度失敗しようとも死滅も失意も崇高なりという自覚に立って，〈自由〉は守られねばならないと説かれる。〈自由〉の退陣は最後の最後である。

From Noon to Starry Night（真昼より星の輝く夜へ）篇中の Thoughts（所感）では，その次の Mediums（媒体）の詩とともに，〈制度尊重主義〉(institutionalism) の無能力ぶりに立ち上がる国民の〈直覚的英知〉(intuitive wisdom) と，それによって支えられる〈民主主義〉の賛歌が木霊(こだま)する。〈輿論〉(public opinion) の決定力，正銘の〈新世界〉(New World)，〈民主主義国家群〉(the Democracies) が登場し，〈唯物主義〉(materialism) も十分に吟味される。

同篇の Thick-Sprinkled Bunting（密集した星の旗）では，〈王者の旗〉(flags of kings) の上に〈庶民の旗〉(flag of man) が掲げられる。

同じく As I Walked These Broad Majestic Days（かかる広壮なる時代に生きて）の詩では，〈自由〉(Libertad) と〈神聖な均等性〉(divine average) が実在のものとなり，地上の一切の奴隷には自由が与えられる。

Song of Parting（別離の歌）篇の Years of the Modern（現代よ）では，〈自由〉は完全に武装され，一方には〈律法〉を，他方には〈平和〉を従えて出現する。一般国民も精神的により強壮な存在となり，より〈神〉に似かよったものとなる。

Good-Bye My Fancy（わが空想よ，さらば）（第二追補篇）の序詞として述べられているように，南北戦争において彼が実地に見聞した戦闘，殺戮の日々，悲惨な苦難の時代，戦傷者，戦死者達の大犠牲を背景にして，創造的な一大覚醒によって産み出され，結実されたものこそこの理想国アメリカであり，民主主義の賛歌 *Leaves of Grass* である。

Sands at Seventy（古稀の流砂）篇の中の America (1888-9) では，〈自由〉と〈法〉と〈愛〉の国，アメリカが簡潔に描かれている。

Centre of equal daughters, equal sons,
All, all alike endear'd, grown, ungrown, young or old,
Strong, ample, fair, enduring, capable, rich,
Perennial with the Earth, with Freedom, Law and Love,
A grand, sane, towering, seated Mother,
Chair'd in the adament of Time.[61]

（平等な娘たち，平等な息子たちの中心地，
すべてが，成年者，未成年者，若者，老人のすべてが一様にいつくしまれる。
強き者，豊かな者，正しき者，忍耐する者，有能なる者，富める者のすべてが。
〈大地〉とともに，また〈自由〉，〈律法〉そして〈愛〉とともに永遠であり，
偉大にして健全な，そそり立つ〈御母〉は，
不壊(ふえ)の〈時〉の流れの中に毅然として坐っておられる。）

〈自由〉が〈愛〉の変身である〈寛容〉(Tolerance) によって平衡をとり，〈法〉によって統治されるとき，ワシントンの真の記念碑も建立(こんりゅう)される。[62]

20世紀もはや70年代に入った今日，我々の社会はマス・プロ，マス・コミ，コンピューターなど，物質的超絶主義の中で，猥雑で不統一なアナーキー的現象が生起している。経済的，思想的，政治的対立は国の内

外に見られ，権力闘争も例外ではない。大自然との調和を完全に欠いた不健康さが随所に顔をのぞかせ，物質的にも精神的にも公害の現象が著しい。

我々は〈草の葉〉は白人と同様に黒人の間にも成長することを知らされる。

〈女性〉と〈男性〉の平等をうたう歌！

小さくしてしかも最大の主題，〈個人の自我〉(One's-Self)——〈新世界〉の中核！

実在の事物も〈仮象〉(Apparitions) であり，概念に過ぎないとするホイットマンの神秘主義！

晩年には小さな汚点，片々たる歌屑と回想されている *Leaves of Grass* は，永遠に〈民衆〉の可能性を語り，〈個人〉の完成を称揚しつづける，天然の雨水の〈最後の雫〉(last droplets) である。

（注）

1) 牧野力編，Bertland Russell, What Is Democracy？（成美堂刊），p. 7

2) Harold W. Blodgett and Sculley Bradley, *Leaves of Grass*, p. 505, Songs of Parting, So Long !, ll. 53, 54

3) 拙著，苫小牧工業高等専門学校紀要第4号所載の，('Leaves of Grass' にみられる「愛」の本質について）を参照されたい。

4) 拙著，苫小牧工業高等専門学校紀要第2号所載の，（ホイットマンの thanatopsis について）を参照されたい。

5) 英語青年（研究社刊），June, 1967, 寿岳文章，「ホイットマンと東洋」，p. 4。なお本書中の，小玉晃一「有島武郎におけるホイットマン」によると，有島は明治40年の帰国後，母校札幌農学校で英語を教え，教室でもたびたびホイットマンを講義している。また日本の教室で最初にホイットマンを紹介したのは，ラフカディオ・ハーン（東大，明治29～36年）のようである。

6) 戦後，昭和24年5月31日，朝日新聞社より詩集「草の葉」(450円）を発行している。

7) 1871年に Democratic Vistas として，また1888年には London で Democratic Vistas and Other Papers というタイトルで出版された。後者については，木村艸太訳，民主主義展望，ウオルト・ホイットマン全集第5巻（日本読書組合，昭和22年10月10日刊）がある。

またホイットマンによって，1882年に Specimen Days & Collect として，Collect（集録）中に収められている。

8) 本文中にもつぎのように各所に見える。

To-day, ahead, though dimly yet, we see, in vistas, a copious, sane, gigantic offspring. (ll. 23, 24)

What I say in these Vistas has its main bearing on imaginative literature, especially poetry, the stock of all. (ll. 162, 163)

Upon them, as upon substrata, I raise the edifice design'd in these Vistas. (ll. 91. 92n)

Much is there, yet, demanding line and outline in our Vistas, not only on these topics, but others quite unwritten. (ll. 1276, 7)

..., and the copious races of complete men and women, along these Vistas crudely outlined. (ll. 1301, 2)

(This Soul—its other name, in these Vistas, is LITERATURE.) (l. 1635)

（アンダーラインは筆者，Vはほとんど大文字，また全部複数形である。）

9) H. W. Fowler and F. G. Fowler, The Concise Oxford Dictionary, p. 1433

10) Richard Chase, *Walt Whitman Reconsidered*, p. 153

11) Floyd Stovall, *Walt Whitman*, p. xxv

The book (注＝Leaves of Grass) is consequently a trilogy, showing how freedom may be secured for the body through democracy, for the heart through love, and for the soul through religion.

12) Ibid., p. xv

William Sloane Kennedy には *In Re Walt Whitman, Reminiscences of Walt Whitman* などの著書がある。

13) Floyd Stovall, *Walt Whitman, Prose Works 1892*, volume ll, *Collect and Other Prose*, p. 535

14) Blodgett and Bradley, op. cit., p. 276　By the Roadside（路傍にて）篇の詩。

15) Stovall, op. cit., p. 393

16) 長沼重隆訳，草の葉（角川書店刊），p. 375
17) Stovall, op. cit. (*Whitman*), p. xv
18) スチーブンソンやモーロアが引用している彼の有名な言葉，「私が自家撞着だって？よろしい，私は群衆を包含しているのだから。」が考えられる。（木村艸太著，前掲書，p. 7）
また，民主主義のような大問題自体が，相抵触する反面を持ち合わせていることを彼は指摘している。
...—for there are opposite sides to the great question of democracy, as to every great question—I feel the parts harmoniously blended in my own realization and convictions,...
(Stovall, op. cit, Prose Works, p. 363, Democratic Vistas, ll. 38–40)
19) Gay Wilson Allen, *Walt Whitman Handbook*, p. 236
Eduard Bertz, *Der Yankee-Heiland* (Dresden: Reissner, 1906),...der Verkünder einer wissenschaftlich haltbaren Religion, also einer einheitlichen philosophischen Weltanschauung,...
20) 前掲「英語青年」，常田四郎，ホイットマン評価の流れ，p. 96
21) Henry M. Christman, *Walt Whitman's New York*, pp. xi–xii
22) Chase, op. cit., p. 155
23) Blodgett and Bradley, op. cit., p. 411
「秋の小川」(Autumn Rivulets) 篇の詩。11. 4–7
24) Passage to India は1871–81年の作品である。そして，1869年5月10日，大陸横断鉄道を完成する最後の黄金の大釘 (spike) が打ち込まれた時には，大陸横断の電信（1861年にすでに開通）により待ち望んでいた両岸の住民たちに知らされた。 (Encyclopedia Americana, vol. 27, p. 670)
また1858年には，すでに Cyprus W. Field によって大西洋横断の最初の海底電線が敷設されている。
(Ibid., p. 688)
25) 福田陸太郎訳，ホイットマン詩集（世界の名詩集4）（三笠書房刊）p. 231
26) Stovall, op. cit., p. 528
"Cure the bite with a hair of the same dog."
27) Ibid., p. 368
For, I say, the true nationality of the States, the genuine union, when we come to a moral crisis, is, and is to be, after all, neither the written law, nor, (as is genearlly supposed,) either self-interest, or common pecuniary or material objects—but the fervid and tremendous IDEA, melting everything else with resistless heat, and solving all lesser and definite distinctions in vast, indefnite, spiritual, emotional power. (Democratic Vistas, ll. 199–205)
28) Ibid., p. 377
...their entire reliability in emergencies, and a certain breadth of historic grandeur, of peace or war, far surpassing all the vaunted samples of book-heroes, or any *haut ton* coteries, in all the records of the world. (ll. 456–9)
29) Ibid. p. 378
..., many of them only boys in years—mark'd their decorum, their religious nature and fortitude, and their sweet affection. (ll. 497–8)
30) Floyd Stovall, *Walt Whitman, Prose Works 1892*, volume I, Specimen Days, p. 112–3
Three Years Summ'd Up
31) 杉本喬訳，ホイットマン自選日記 上 p. 167–9
32) Stovall, op. cit., vol. I, p. 379
...; the specimens and vast collections of the ignorant, the credulous, the unfit and uncouth, the incapable, and the very low and poor. (Democratic Vistas, ll. 533–5)
33) Ibid., p. 383
As circulation to air, so is agitation and a plentiful degree of speculative license to political and moral sanity. (ll. 660–3)
34) Allen, op. cit., p. 208
35) Blodgette and Bradley, op. cit., p. 121
.....
As base and finalè too for all metaphysics.
.....

The dear love of man for his comrade, the attraction of friend to
friend,
Of the well-married husband and wife, of children and parents,
Of city for city and land for land.　　(The Base of All Metaphysics, ll. 3, 13-5)

36) Ibid., p. 134
前出の A Promise to California とともに Calamus 篇にある詩。
この Calamus 篇には，紀要第4号の方でもふれたように，comradeship の濃縮された姿，魂と魂の理想的関係としての〈愛〉の賛歌がおさめられている。カラマスの草は〈友愛〉の象徴であった。

37) 牧野力編，前掲書，p. 2

38) Stovall, op. cit., volume ll, p. 401

39) Blodgett and Bradley, op. cit., p. 52
I speak the pass-word primeval, I give the sign of democracy,
By God! I will accept nothing which all cannot have their coun-
terpart of on the same terms.　　(Song of Myself, ll. 506, 7)

40) Allen, op. cit., pp. 183, 4

41) Blodgett and Bradley, op. cit., p. 455
Whispers of Heavenly Death（天国の死の囁き）篇にある。原題は，As a Strong Bird on Pinions Free で，1872年6月26日に Dartmouth College の卒業式に読まれたもの。

42) Ibid., pp. 22, 3, ll. 164, 5

43) Stovall, op. cit., volume l, p. 295, ll. 12-16

44) 清水安治著，ホイットマン新研究，(東京堂，昭和12年刊)，p. 12-22
イエスの有名な「山上垂訓」から出発する隣人救済の実践道徳，〈奴隷制廃止〉(anti-slavery)〈婦人の権利〉(women's right) などの問題も包含していた此の派の開粗，George Fox (1624-90) が考えられる。
また，ホイットマンが10歳のときにその説教を聞いた同派の教会分立論者 Elias Hicks は，人間の〈本性〉(own nature) に内在する宗教を語る最も民主的な宗教家であり，予言者であった。

45) Blodgett and Bradley, op. cit., p. 447
Whispers of Heavenly Death 篇にある。

46) 下線は筆者。この Democratic Vistas の第1263-3行においては次のように記述されている。
As we have shown the New World including in itself the all-leveling aggregate of democracy, we show it also including the all-varied, all-permitting, all-free theorem of individuality,...

47) Blodgett and Bradley, op. cit., p. 152

48) Ibid., p. 392
Autumn Rivulets（秋の小川）篇にある。

49) 清水春雄著，ホイットマンの心象研究（篠崎書林刊），p, 55

50) Blodgett and Bradley, op. cit., p. 111
Children of Adam（アダムの子等）篇にある。

51) Ibid. p. 124
Calamus 篇にある。

52) Stovall, op. cit., volume ll, p. 538, ll. 16-21

53) Ibid., p. 379, ll. 544-7

54) Ibid., p. 380, ll. 561-7
...in this other field, by democracy's rule that men, the nation, as a common aggregate of living identities, affording in each a separate and complete subject for freedom, worldly thrift and happiness, and for a fair chance for growth, and for protection in citizenship, &c., must to the political extent of the suffrage or vote, if no further, be placed, in each and in the whole, on one broad, primary, universal, common platform.

55) Ibid., pp. 380-I, ll. 584-5
...., the democratic formula is the only safe and preservative one for coming times.

56) Ibid., p. 392, ll. 912-4
And, if we think of it, what does civilization itself rest upon—and what object has it, with its religions, arts, schools, &c., but rich, luxuriant, varied personalism?

57) 他の一つは，同じ By the Roadside 篇中の To Old Age（老齢に寄せて）。

I see in you the estuary that enlarges and spreads itself grandly as
it pours in the great sea.

58) Stovall, op. cit., vol. II, p. 387–8
I think, after all, the sublimest part of political history, and its culmination, is currently issuing from the American people.

59) Blodgett and Bradley, op. cit., p. 107
Children of Adam 篇にある詩。(うねり進む海洋のごとき群衆の中から)。

60) Ibid., p. 460
To be thy natal stars my country, Ensemble, Evolution, Freedom,
Set in the sky of Law. (Thou Mother with Thy Equal Brood, § 6, l. 102–3)

61) Ibid., p. 511

62) Ibid., p. 520
Sands at Seventy 篇, Washington's Monument, February, 1885 (ワシントン記念碑, 1885年2月), ll. 13–4

(昭和45年1月19日受理)